

情報処理教育の将来

計算機センター所長 文学部教授 轡 田 收

来年4月から中学の技術・家庭の授業に「情報基礎」という単元が組み込まれることになった。指導要領には、「コンピュータの操作等を通して、その役割と機能について理解させ、情報を適切に活用する基礎的な能力を養う」とあるというから、実践よりも電算機活用の意義を教えることにその目標があるらしい。これは中学生に対しては、アプリケーション利用を教えるよりも難しいかも知れない。すでに選択科目の一つとして、「情報基礎」の授業をしている学校もあるそうだが、その内容は千差万別、簡単なプログラムを作るところがあるかと思うと、パソコンに慣れさえすればいいという遊び中心であったり、またデータベース操作を学習させる学校があるらしい。今のところは教える側の考え次第といった様子だが、それは画一主義の国のこと、そのうち大方の傾向が決まることであろう。そして全国規模で開始されることになると、7年後には一応コンピュータ知識をもった学生が入学してくることになる。

こうした情勢を控え、大学は教員を養成する場でもあることを考えれば、「情報基礎」で教えるべき項目を検討・整理し、カリキュラム化する必要が生じてくると思われる。それにつれて、情報処理教育は、ワープロができる、表計算をしてグラフを作る、データベースを構築するといった技能面にはとどまらなくなるであろう。その上、これまで情報処理が教科として所属している一般教育科目は、大学設置基準の改正によって消滅する。したがって、本学でも新カリキュラムに移行するにあたって、情報処理教育科目の位置づけが当然検討の対象となる。

じつは、情報処理という行為はすぐさまコンピュータに結びつくわけではない。いかに情報を集めるか、収集した情報からどのような結論がえられるか、あるいはどのような結論に達するべきか、こうしたことは、特殊な領域の問題ではなく、あらゆる理論、あらゆる学問的認識の基本なのである。したがって、ただ便利だから、という意識で機械を使っていると、使っているつもりで、いつの間にか機械やソフトに合わせた頭の持ち主になりかねない。まず情報とはそれを集める主体、つまり自分の目的と意志があって価値が生じること、こうした確認から情報処理教育を始めてはどうだろうか。おそらくは、将来“computer-ethics”というような分野も成立して、情報やデータの取り扱いの倫理を初めに、用紙のムダ使いを戒め、森林保護運動の一環を担う、といったことも扱うようになることであろう。